

皮膚がんメラノーマ抑制

近大チーム、化合物を発見

皮膚がんの一種「悪性黒色腫（メラノーマ）」の増殖を抑える化合物を発見したと、近畿大の杉浦麗子教授（ゲノム創薬）らのチームが発見した。がん化した細胞を標的とするため、正常な細胞への影響は少ないという。論文が、日本分子生物学会の科学誌（電子版）に掲載された。

チームは、メラノーマの増殖を促す「マップキナー

② 悪性黒色腫（メラノーマ）

色素成分の「メラニン」を作る細胞ががん化することで発症する。国内の推定患者数は約4000人で、他のがんと比べて多くはないが、早期に転移するなど致死率が高い。

ゼンと呼ばれる酵素に着目。がん細胞の増殖を抑える可能性のある化合物を43種類調べ、この酵素に作用する「ACA-28」という化合物を発見した。

この化合物を、試験管で人のメラノーマの細胞3種類に加えたところ、9割前後が死滅し、増殖が抑えられた。一方、正常な細胞は40%が生存し、既存の抗がん剤に比べ、正常細胞への影響は少なかった。杉浦教授は「この化合物が、がん細胞に強く作用する詳しい仕組みを調べたい」と話す。

西田栄介・京都大教授（細胞生物学）の話「新たな治療につながる可能性がある。今後は他のがんでの効果も検証してほしい」

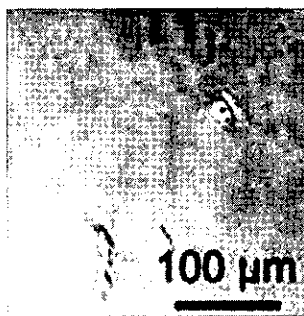
29. 5. 10

皮膚がん抑制物質発見

近大、新薬開発に可能性

皮膚がんの一種の悪性黒色腫（メラノーマ）細胞の増殖を抑える化合物を発見したと、近畿大の杉浦麗子教授（ゲノム創薬）のチームが発見した。がん化した細胞を標的に作用するため、正常な細胞への影響が

少なく、副作用の少ない新規の抗がん剤開発につながる可能性があるという。チームは特定のメラノーマ細胞で、がん細胞の増殖に関わる酵素「MAPキナーゼ」の一種が異常に活性化している点に注目。独自



人のメラノーマ細胞。下は「ACA-28」を添加し細胞死などを引き起こした状態

開発した化合物の探索システムを使い、MAPキナーゼの働きを調整できるものを調べ、「ACA-28」という化合物を見つけた。

人のメラノーマ細胞を用いた培養実験で、ACA-28にはメラノーマ細胞の増殖を抑制したり、アポトーシスと呼ばれる細胞死を引き起こしたりする働きがあることが分かった。メラノーマは悪性度や致

死率が高いがんの一つ。杉浦教授は「治療の選択肢の一つになるように研究を進める」と話している。